

『新版 質的研究入門 <人間の科学>のための方法論』

ウヴェ・フリック著 小田 博志 監訳 春秋社 (2011年)

第24章 会話、ディスコース、ジャンル分析 / 第25章 ナラティブ分析・解釈学的分析

第24章 会話、ディスコース、ジャンル分析 (pp.406-419)

- データ収集で得られた発話を理解し、分析したいのなら、その発話がなされた文脈を踏まえる必要がある
- 前章で論じた解釈の手順では、発話をカテゴリーへ配列し直していく中で、テキストの全体的な形が削ぎ落とされていくことになる
- そこで代替策として、**テキストの全体的性質により注意を払うアプローチ**が考案された
- それらのアプローチは「シークエンス分析の原則を導きとする。シークエンス分析とは、**社会秩序という考え方を、方法論に取り入れるものである**。そこでは、社会秩序が相互行為の遂行において再生産されるということが前提とされる」(Bergmann 1985: 313)
- 文脈に対する感受性が方法論上の原則

- **会話分析**：会話の順番を交代することで秩序が生み出される
- **客観的解釈学**：行為の遂行の中で意味が蓄積される
- **ナラティブ分析**：語られる内容を提示するために信頼できる唯一の方法 (25章)

■ 会話分析 (p.407-412)

- 研究目的で作成されたテキスト (インタビューへの回答など) の内容の解釈よりも、日常的状况の形式面の分析に焦点を当てる手法
- ベルクマンが……これをエスノメソドロジ的研究の主流として位置付けている

- 会話分析とは、……社会的な相互行為を、意味が込められた社会秩序が産出され、保持される絶え間ないプロセスとして捉え、それを厳密に実証的な方法で研究するという事
- 方法的に、会話分析では、現実に進行している出来事をできるだけそのままに記録しようとし (そのために視聴覚記録と、その文字化が行われる)、その記録から体系的な比較分析を通して、社会的相互行為及びそれを行為者が扱う実践の構造原理を分離して取り出そうとする

(Bergmann 2004b: 296)

i) 会話分析の手順 (p.409-411)

- テン・ハブは会話分析の方法を用いる研究プロジェクトを4つのステップにまとめている
 - (a) 自然な相互行為の音声記録を入手する、もしくは作成する
 - (b) その記録全体もしくは部分を文字化する
 - (c) 選択した部分を分析する
 - (d) 研究結果を報告する

- 会話分析は次のような手順も含む (p.409, 1.7-14)
 1. その都度の会話タイプの秩序を構成する要素と思われる、特定の発話や発話のつながりをトランスクリプトの中で見つける
 2. この要素が確認される「事例のコレクション」をまとめる
 3. 相互行為において秩序を作り出すための手段としてその要素がいかにかに用いられているのか、また、相互行為の組織化におけるどのような問題にその要素が解答を与えるのかが明らかにされる
 4. そうした相互行為の組織化の問題に一般的に対処する方法の分析が行われる

- 会話分析の手掛かりとしてよく選ばれる点は、いかに会話が始められているのか、その会話を秩序ある形で締めくくるためにどのような言語的実践が用いられているのかなどの問い

- 会話分析の本質的な特徴は、シークエンス（会話が進行する順序）に厳密に沿って解釈を行う点
 - 出来事の秩序は、その出来事が生じていく順番を通して示される必要がある
 - 会話の中で順を追って形成される秩序は、その順番に焦点を当てる分析によって明らかにされる

- もう一つの特徴は文脈の強調 (p.410, 1.29-p.411, 1.4)
 - 会話の中で意味や秩序を生み出す働きは、ローカルな実践としてのみ、つまり具体的な文脈との関連でのみ分析できる
 - その文脈の中で、それらの働きは相互行為の中に埋め込まれており、その相互行為はさらにその文脈の中に（例えば制度的に）埋め込まれている

- テン・ハブ：会話の修復

- 「隣接ペア」=ある特殊な反応は、大抵の場合、会話への何らかの発言に続いて行われるということ
 例) 質問の後に回答がくる/電話で「もしもし」と言えばそれに応える
 - 「修復」とは、会話で意思疎通の困難が生じた時、人々が「修復機構」を働かせることを指す

ii) 方法論一般への貢献は何か？ (p.411)

- 日常会話や特殊な談話の形式がいかに社会的に形成されるのかを明らかにする
- 結果は、そうした会話で用いられる言語的な方法を記録したもの
- 自然な状況の分析がいかに説明力を発揮するのか、社会的相互行為が組み立てられる論理をたどっていく厳密なシークエンス分析がいかに知見をもたらし得るのかわかる

- iii) この方法を研究プロセスにいかに関与させるか？ (pp.411-412)
 - 理論的背景：エスノメソドロジー（6章）
 - 研究設問：いかなる形式的な進行によって射愛的現実を作り出されているのかを明らかにする（9章）
 - データ：分析されるべき会話プロセスの例の収集（11章）
 - 記録：明示的にデータ収集の形をとることは避けられ、日常的な相互行為のプロセスをできるだけ正確に記録しようとする（22章）

- iv) この方法の限界は何か？ (p.412)
 - 会話の内容に対して無関心
 - 形式的な詳細にとらわれるあまり全体像を見失っているのではないかという批判

1) ディスコース分析 (p.412-417)

- いくつかのバージョンが存在する
- ディスコース心理学
 - 「コミュニケーション的、相互行為的なワークを実施するために、会話の中で、出来事のバージョン（記憶、描写、定式化）が、その参加者によっていかに構成されるか」（Edwards and Potter 1992 :16）
 - 会話分析が出発点として挙げられているが、その実証研究の焦点は「会話の内容、その主題、そして、その言語的というよりは、社会的な組織化」（1992: 28）に当てられる
 - 記憶や認知などの心理現象が、社会的かつディスコース的事象として分析される
 - 重点が置かれるのは、その出来事のバージョンがいかに構成されるのか
→「解釈のレパートリー」が明らかにされる

- ディスコース分析の細分化：批判的ディスコース分析
 - 批判、イデオロギー、権力といったテーマに焦点が当てられる

- i) 方法論一般への貢献は何か？ (p.415)
 - 会話分析の場合より社会科学的なテーマが課題として取り上げられる

- ii) この方法を研究プロセスにいかに関与させるか？ (p.415)
 - 理論的背景：社会構築主義（7・8章）
 - 研究設問：社会的現実の形成がいかに明らかにできるか（9章）
 - データ：メディアの記事からインタビューに至る多様な実証資料（11章）
 - 解釈：テキストやインタビューのトランスクリプトに基づく（22章）

- iii) この方法の限界は何か？ (p.415)
 - 方法論的解説が不十分である

2) ジャンル分析 (p.416-417)

- 会話分析的な手順がより大きい単位の資料と会話の形態（ジャンル）に拡張して用いられる
 - i) 方法論一般への貢献は何か？ (p.417)
 - コミュニケーションの形式的パターンと共に内容も分析される
 - 会話分析の方法的厳格さと内容志向のアプローチとが組み合わせられる
 - ii) この方法を研究プロセスにいかに関り込むか (p.417)
 - 理論的背景：社会構築主義（6、7章）
 - 研究設問：特定の対象やプロセスに関するコミュニケーションに用いられるパターンとその機能を通して、社会的現実の産出を明らかにする（9章）
 - データ：コミュニケーションの記録
 - 解釈：記録のトランスクリプトをもとに行う（22章）
 - iii) この方法の限界は何か？ (p.417)
 - コミュニケーションのジャンルの定義が他の単位より明確でない
 - 分析が複雑で時間がかかる

25章 ナラティブ分析・解釈学的分析 (pp.420-433)

■ ナラティブ分析 (pp.420-426)

- ナラティブは、人生の経過を再構成するために、ナラティブ・インタビューにおいて促され、収集される
- ナラティブな現実の構成/構築を分析する上で、人生がナラティブとみなされる

i. 出来事を再構成するためのナラティブ・インタビューの分析 (p.421-422)

○ シュツツェの提案

- ここでの分析の目標は、語り手の自分自身の人生に関する主観的な解釈というよりは「事実的な経過の関連」を再構成することに置かれる

○ ハウパートの提案

- ① テキストにおける発話の言い換えをしたり、インタビューのその都度の文脈や環境を明らかにしたりすることによって抽象化が進められる
- ② ここの事例のストーリーを中核的なストーリーに圧縮したのち、それらをプロセスの分析タイプに分類する
- ③ これらのタイプはさらに、生活世界的な環境に結び付けられる
- ④ ナラティブの経過からライフヒストリーの経過が再構成される

- 人生のナラティブから事実の経過を再構成するやり方は、語られるものと実際に起こるものとが「相同的」だとの仮定を前提としている

ii. 人生の構成としてのナラティブ・データの分析 (p.422-425)

○ ブーデの見解

- ナラティブという表現形式の中で、そこで表現されるものが主観的かつ社会的に構成されるという考え方
- 例えばナラティブ・インタビューの中で、人生が構成されると考える

○ ブルーナーら

- ライフヒストリーを社会的に構成されたものとして捉える
- 目指すのは、事実経過を再構成することというよりは、主観的・社会的な構成のプロセスを明らかにすること

○ ローゼンタールとフィッシャー＝ローゼンタール

- インタビューの中で語られたライフストーリーと、インタビュイーによって生きられたライフヒストリーとを区別して捉えている

○ ヒルデブラントとヤーン：家族のナラティブ

- ① まずナラティブからその家族の「客観的な」社会的データを再構成する
- ② 決定の選択の幅との関連で、また実際の下された決定と比較しながら解釈する
- ③ 明らかになった決定のパターンから、その家族の事例の構造に関する仮説を形成し、さらに解釈を進める中でそれらの仮説を系統的に検証する
- あるナラティブの冒頭のシーケンスと、そこに現れる「研究参加者の自己提示」が、分析の基点として重視される

iii. 方法論一般への貢献は何か？ (p.425)

○ 共通点

- ナラティブという形態から出発すること
- ナラティブの進行という文脈の中で発話を捉える点

○ 相違点

- ナラティブの位置付け

iv. この方法を研究プロセスにいかに関り込むか？ (p.425)

- 理論的背景：主観的意味の分析 (6章)
- データ：ナラティブ・インタビュー (9章)
- 事例収集：段階的サンプリング (11章)
- 分析：分析事例を互いに比較対照し (29章)、理論構築を目指した一般化が行われる (8章)

v. この方法の限界は何か？ (p.426)

- データとしてのナラティブが現実に一致すると素朴に前提にされる点
- 個別事例への固執

▪ 客観的解釈学 (p.426-432)

- エヴァーマンらが、元々自然な相互行為（家族の会話など）の分析のために考案したもの
→芸術作品や写真などまで含む、さまざまなドキュメントが分析されるように
- シュナイダーはこの方法をインタビューの解釈のために修正する
→「世界がテキストとして」理解されるようになっている
- このアプローチでは、ある発話や行為のその当事者にとっての主観的な意味と、客観的な意味とが区別される
- ここで「客観的な意味」とは、ある行為の「潜在的な意味の構造」のこと
- このような構造は、複数の段階にわたる科学的分析の枠内でのみ解明できるとされる

i. 客観的解釈学の手順 (pp.426-430)

- 初期の客観的解釈学の目標は「客観的な意味の構造の再構成」に置かれていた
 - 分析の関心は、テキストを算出した人の試行、願望、希望、信念には向けられない
 - 主観的な系をテキストに結びつけることは妥当でないと見なされる
 - 唯一妥当なものは、ある言語的・相互行為的コミュニティにおけるテキストの客観的な意味
 - 後になり、「客観的」というラベルは研究対象を超えて捉えられるように
 - 研究の手順自体が客観的研究を保証するものとみなされるようになる
 - 客観的解釈学の分析は「厳密にシーケンス的」に行われる
 - 出来事やテキストの時間経過を追う形で解釈する
- ① 分析は同じテキストについて、複数の分析者のグループで行うべき
 - 分析されるべき事例、およびどのレベルにその事例を位置付けるのかを定義していく
 - ② 定義に引き続いて、おおまかなシーケンス分析が行われる
 - 目的は、ある発話が埋め込まれた外的な文脈を明らかにし、その影響を考慮に入れるため
 - 大まかな分析の焦点は、研究対象の行為や相互行為が解決しようとする、具体的な問題は何かを考察することに当てられる
 - データがいかに成立したかを明らかにすることにつながる
 - ③ 中心的な分析段階である精密な分析が行われる（囲み 25.2 参照）
 - 本質的特徴は、ある発話の客観的文脈を再構成することにある
 - 発話や行為の主観的な意味の分析には、従属的な役割しかない
 - ここでの関心は、相互行為の構造に向けられる
 - コミュニケーションの形態が、他の状況においても一貫性のある形態として裏付けられるかどうか、テキストの中で検証される

- ii. 最近の進展 (pp.430-431)
 - 行為の経過に沿った分析を行うことによって、社会的意味の積み重なりが再構成される
 - インタビューの発言から、研究対象の行為システムに関するストーリーを順番に沿って再構成する必要がある
- iii. 方法論一般への貢献は何か? (p.431)
 - シークエンス分析の手順が最も一貫した形で綱領化され、また方法的な手順として実施に移されている
 - 主観的なものの見方は、社会的事象への一つのアクセスに過ぎず、意味は社会的なものレベルでも産出されることを明らかにした
 - 社会科学をテキストの科学とする考え方が一貫して維持されている
 - グループで解釈することの提唱
→視点の多様性が増し、また解釈の妥当性が高められる
- iv. この方法を研究プロセスにいかに組み込むか? (p.431)
 - 理論的背景：構造主義モデル (6章)
 - 研究設問：行為や対象の社会的な意味の説明 (9章)
 - サンプリング：段階的サンプリング (11章)
 - データ：明確なデータ収集の方法の使用は控え、日常的な相互行為が記録され、文字化される。インタビューやフィールドノートを用いることも
 - 一般化：事例研究から始めて、それらを比較対照する (29章)
- v. この方法の限界は何か? (pp.431-432)
 - 実施に多大な手間がかかるため、単独事例の研究で終わってしまう場合が多い
 - 単独事例の分析から、一般的な主張への飛躍が、唐突な形でなされることも
 - 方法の伝授が一般的になされない
- 社会科学の解釈と解釈学的知識社会学 (p.432)
 - これらのアプローチは、「客観的」という言葉はもはや使わず、**知識の社会的構築に焦点を当て**るのである
 - インタビュー・データよりは、標準化されていないデータ (相互行為のプロトコル) が選ばれる
 - 研究者は調査現場にできるだけ無垢な目でアプローチし、非構造化のデータを収集すべきとされている
 - 3つの段階を踏んでデータを解釈する
 - ① ストラウス (23章) に従いオープン・コード化が適用される
→その焦点はシークエンス構造に当てられる
 - ② 研究者は強く結びついた意味の単位と、それら部分単位とをつなぐ概念を探す
 - ③ 新しいデータを用いて、それまでの解釈が検証され、修正され、拡張される

<まとめ> (p.432)

- シークエンス的方法に共通して見られる特徴は、テキストの時間的・論理的構造を、解釈の出発点に据える点
 - 23章のカテゴリー化の方法よりも、テキストに密着し、その流れを追っていくことになる

- テキストの形式的側面と内容の関係
 - **会話分析** (24章) は、相互行為の形式的な特徴に関心を向ける

 - **ナラティブ分析** では、インタビューにおけるナラティブの部分と論理的な部分との間に形式上の区別が立てられる
 - 以下の2つを判断するために区別する
 - (1) どのテキストの部分により関心に向けて解釈を行うのか
 - (2) 述べられた内容に信憑性があるのか

 - **客観的解釈学** を用いた解釈では、テキストの形式的分析はむしろ二の次に行われる